

森村誠一

新・オリエント急行
殺人事件

KADOKAWA NOVELS

ツアー参加者が次々と殺される!!

オリエント・エクスプレス

“伝説の列車”と日本を舞台に、新境地
華麗なる本格長編推理の傑作。

KADOKAWA NOVELS

新・オリエント急行殺人事件

森村誠一



カドカワパブルズ

昭和六十年十一月二十五日初版発行

著者 森村誠一 もりむらせいいち

発行者 角川春樹

新・オリエント急行殺人事件 しん きゆうこうさつじんじけん

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 株式会社鈴木製本所

装丁者 岡村元夫

発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見一三 振替東京三一九五〇八

〒(三)電話営業〇三三八八五二 編集〇三三八八四二

Printed in Japan 落丁・乱丁本はお取替えいたします

ISBN 4-04-770209-9 C0293

森村誠一

新・オリエント急行
殺人事件

KADOKAWA NOVELS

ツアー参加者が次々と殺される!!

オリエント・エクスプレス
"伝説の列車"と日本を舞台に、新境地に
華麗なる本格長編推理の傑作。

ADVENTURES OF SHERLOCK HOLMES

●作者のことば

この作品は私としては珍しい「フイダニツト「たれが犯人か」をテーマにした本格推理である。

登場人物は十名、この中に犯人が潜んでいる。一人消されるたびに犯人像が絞られてくる。最後に用意された意外な結末に恐るべき現代の犯罪動機が隠されている。

一見、偶アットランダム然に集められたオリエント急行十名の乗客を結ぶ共通項は何か。

夢の列車オリエント急行に舞台を借りて推理劇の旅に読者と共に出発したい。
行先表示は謎、乗り込んだら途中下車はできない。

略歴 一九三三年埼玉生。青学大卒。乱歩賞・推理作家協会賞・角川小説賞受賞。推理小説の第一人者。



カドカワパブルズ

昭和六十年十一月二十五日初版発行

著者 森村誠一 もりむらせいいち

発行者 角川春樹

新・オリエント急行殺人事件 しん きゆうこうさつじんじげん

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 株式会社鈴木製本所

装丁者 岡村元夫

発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見一三 振替東京三一九〇八
〒102 電話営業〇三二三八一八五二 編集〇三二三八一八五二

Printed in Japan 落丁・乱丁本はお取替えいたします

ISBN 4-04-770209-9 C0293

KADOKAWA NOVELS

新・オリエント急行殺人事件

森村誠一

伝説の列車	11
出土された妻	22
不可侵の夫	35
犯罪の骨格	45
武装せる情事	55
犯行の遺跡	66
容疑順位	79

ダブルオーナ
二重の主

85

ヒモをつけられた死体

105

現場の異物

120

密通した動機

137

再会の素地

160

別方向の動機

170

逆転した「百パーセント偶然」

179

殺意の共通項

185

取りはずされた接点

198

地獄への分岐点

211

伝説の列車

1

贅を尽くしたディナーが終ると、乗客たちはレストランカーからバーカーへ移動した。

「やれやれまさに味の芸術ですな」

日本人客は十名、なんとなく寄り集まった。いまの飽食で一段と厚みを増したような米川という五十前後の男が言った。髪は黒々として皮膚はたるみなく艶々としている。五十前後という年齢も三十前後と見える細君と二十歳ちがうと言った彼の言葉から推測したものである。眉が太く唇の引き締まった怡幅のよい男であるが、目の光に卑しさがある。伴っている細君は和装がよく似合う純日本的な造作をし

ており、妍を競う婦人たちのイブニングドレスの中にあつて駒輪子の地に目も彩な手描き友禪の訪問着をまとい一際人目を惹きつけている。

外国人に比べて体形の劣る日本女性がそのハンデイキャップを補い、むしろ差をつける衣装がキモノである。そのキモノの強さを十分に自分のものとした着こなしであり、米川は同乗の男たちの目を集めている妻が自慢げであつた。

「こうなると食物というより作品です」

八束と名乗る三十代半ばと見える頬の削げた男がうなずいた。かたわらのぼつてりした細君の首には金を材料に用いた豪勢な彫金細工のネックレスが燦然と輝いている。米川夫人のキモノと同じくらしいに婦人たちの注目を集めている品である。

八束は細君に気づかれぬように米川夫人の姿形を観察している。その目の色に男の関心がある。

「作品とは、さすがに八束さんらしいご意見ですわ」

米川夫人が八束の関心を十分に察しながらさりげ

ない口調で応じた。

「見事な作品ということはわかりますが、私のような老人にはいささかもたれますなあ」

安養寺と添乗員から紹介された白髪の枯れたような老人がいささか辟易^{へきえき}気味に腹を撫^なでさすった。

「先生のご健啖^{けんたん}ぶりには驚きました。私ですらバンドの穴を一つゆるめました」

安養寺の弟子という金井が素直に驚きを現わした。

「あなたが年甲斐^{としがひ}もなく全部平らげようとなさるからですよ。メーンディッシュを抜いたくらいがちょうどよろしいのに」

かたわらから安養寺夫人がたしなめるように口をはさんだ。これは枯れたような夫と対照的な濃艶^{のうえん}な成熟の盛りにあるような女である。あるいは安養寺は彼女に身体^{からだ}の養分を吸い取られて老化を促されたのかもしれない。だが身体^{からだ}の老残の精気が目に集まったかのような鋭い眼光をしている。

「馬鹿言いなさんな。せっかく高い金を払ったのだ。全部食わなきゃ損じやろうが」

安養寺老人が言ったので、

「あなた、そんなことをおっしゃってはせっかくの雰囲気^{ふんいき}がこわれますわよ」

夫人が顔を赤らめた。

「先生そのお元氣ですよ。若い奥様がたじとなさっておられる」

米川が揶揄^{やゆ}するように言ったので一座に笑声が起きた。米川の言葉に安養寺老人が女盛りの細君に对应する想像図を描いたのである。米川もそれを意識して卑しい想像を刺戟^{しげき}するような示唆^{しそ}を含んだのである。

「先生、なにか一品お拔^{スキップ}きになればおよろしかったのに。その分料金も差し引かれますわ」

梅谷^{うめたに}というビジネスマン体の男の細君が言葉をはさんだ。筋張った女で、顴骨^{びんこ}の張った顔に銀の鎖つきのメタルフレームのめがねをかけている。夫の梅谷が苦味走った浅黒いマスクとスポーツで鍛え上げたようなスリムな体軀^{たいく}の好男子で終始寡黙^{かもく}であるのに反して口数が多く万事にしゃしゃり出て来る。

「いやメニューを見ましたらな、全部食べたくなつたのですわい」

先生と称^よばれた安養寺老人が答えると、梅谷夫人は、

「それでしたら『嗜好自得』というものでございませう。おほほほ」

と気のきいた洒落^{しゃれ}を言つたつもりらしく自分から笑つた。

今宵^{こんや}のレストランカーのメニューは、まずコンソメスープ、オードブルは小海老^{こえび}キャビア添え、ハム煙草^{たばこ}巻状^{まきじょう}フォアグラ、魚^{さかな}がスズキの白ぶどう酒蒸^{じゆ}煮^にのバイ皮包み焼き、メインが牛ヒレ肉洋酒蒸焼、デザートは冷たいババロアでしめくくられる。いずれもパリの一流レストランから直送された材料を車内で調理したものである。これらの味をボルドーのワインが一層に引き立ててくれる。まさに走る一流レストランであつた。

しばらく一同の間に食物と酒の談義がはずんだ。

窓外は真つ暗であるが、時間から測つてパリの接近

しているはずである。

グランドピアノの周りにはタキシードやイブニングドレスに身を包んだ紳士淑女が集まり各国のお国ぶりのど自慢が始まつている。英、独、仏、西語などの歌詞が交錯して一段と国際色が深まつてきた。

「先生一曲いかがですか」

一行の添乗員の水島^{みづしま}が勧めた。彼がこの旅行の出発から帰着までエスコートをする旅行社の社員である。

「いやいや私なんぞが歌うと国辱物です。米川さんどうぞ」

安養寺は尻^{しり}ごみした。

「私はド演歌ですから。まさか演歌の伴奏はできないでしょう」

カラオケでかなり歌い込んでいるらしい米川がピアノの方を口惜^{くや}しげににらんだ。ロンドンから一緒に来たデザイナー一行が、シャンソンを気持よさそうに歌っている。

デザイナーが歌い終つたとき、ピアニストがこち

らの気配をチラリとうかがって軽やかなタッチで鍵盤を叩き始めた。「荒城の月」が歯切れよくアレンジされてバーカーの空間にはずんだ。日本の女性陣の間に歓声が湧いた。

「これなら歌えるわ。みなさん合唱して大和撫子の意気を示しましょうよ」

梅谷夫人が気負い込んで他の三人の婦人を誘った。四人の日本女性がピアノのかたわらに進むと、外国人男性の間から拍手が起きた。

日本女性の合唱が始まると、それに巧妙に合わせでデザイナーのカップルが踊りはじめた。こうなると日本人男性の出る幕はなくなる。彼らはバーカーの隅にあるカウンターに向かって好みのウイスキーをオーダーした。棚には列車内とおもえない世界の銘柄ボトルがずらりと並んでいる。

「どうも私はあのダンスというやつが苦手ですな」

安養寺が踊っているデザイナーや外国人カップルの方を口惜しげに見ながら言った。

「私もですよ。私は終戦時十三歳でして、その後は戦後の混乱期でした。生きるのに忙しくて女と踊っている閑なんかありませんでした。その点、八束さんや、梅谷さんや水島さんはそんなことはないでしょう」

米川は一まわり若い三人の方に目を向けた。

「ぼくらはダンスというよりゴーゴーの世代です」

八束が答えると、

「ゴーゴーというと、男と女が離れて勝手に踊る猿踊りのことですか」

と安養寺が聞いた。

「実際にモンキーダンスともいわれましたよ。一緒に踊っているながらそれぞれが自分の殻の中に閉じこもっている。ぼくらの世代を象徴しています」

八束が言ったとき、盛大な拍手と歓声が生じて、女性陣が歌い終った。だが盛んなアンコールがかかっている。